

特35

811

館

大日本圖書會館

函架號

一册	三八號	四架	一七函
----	-----	----	-----

一本

014563-000-0

特35-811

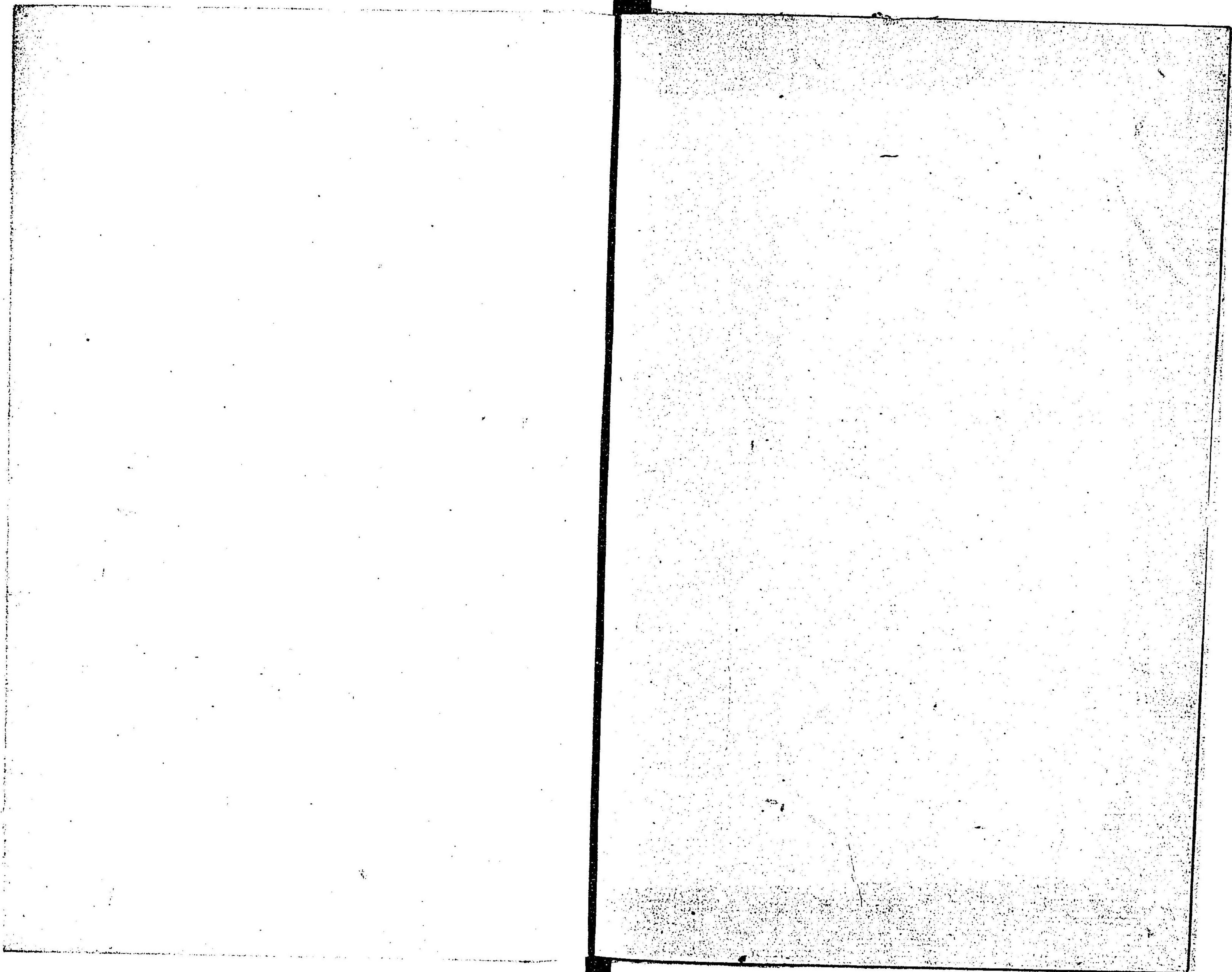
拝神略辞

瀬戸 清次郎/著

M7

ABB-0978





811

東京
書局
藏

圖書

Handwritten text in vertical columns, likely a list or index of items.

○件神界辭序

一

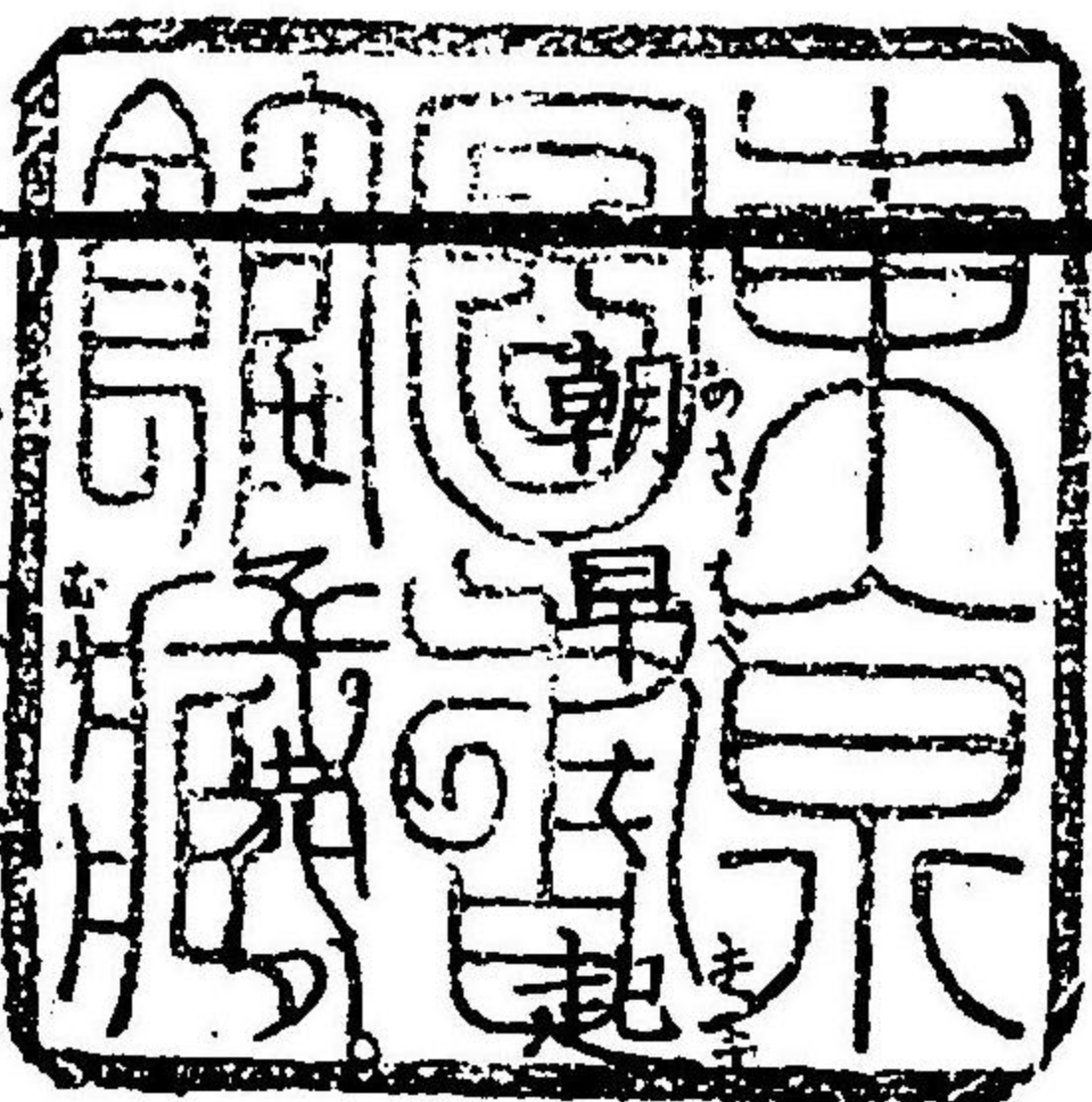
Handwritten text in a cursive script, consisting of five lines of characters.

Handwritten text in a cursive script, consisting of five lines of characters.

毎朝、お参りなさい。お参りなさい。
 お参りなさい。お参りなさい。
 お参りなさい。お参りなさい。
 お参りなさい。お参りなさい。

藤原 兼

拜神畧辭



瀬戸清次郎著

て。貞手を洗ひ口を漱げ、身を正しく
 東方ニ向ひて日字拜し奉る。西の方
 次は出雲國の方に向ひ、次は其國の官幣社亦
 の方に向ひ。次は産土社の方に向ひ、また家内
 の神等ハ其御前に出て拜し奉るべし。

○拜神畧辭

○一

まゝ事にてあらば俗にお扱其方に向ひて。
じますといふことあり
圖の如く扇を笏の心に取持てまづ一度拜み
改てまゝ二度拜みて頭を上げて

嚴 御魂 幸倍 給倍止 畏美 畏美 毋白須

かく白し竟て二度拜て。諸手を四つ宛二度拍
てまゝ一度拜て退くべし

嚴や。は。淨く。健く。いさましきを申まにて神此
御こゝろ此きこく勇ましく坐まゆるしを

申ことあり。御魂とは御恵と申まう如く也。魂
は則給ひ。とまふ。とまえる。ちど格用く言葉に
て。其まやぐて。神此御賜物あまむ也。幸へ給へ
とハ。それ恵とまふ所を幸ひとも幸ひとも云
ふ。俗に幸とい。畏み畏とハ。かしとまりくはる。
俗の神道者の恐み恐とハ。如是畏まじつ、
ふハ言ひ、がえとるあり。如是畏まじつ、
と申ことあり

○次にきて其の拜奉るへき神等の次第。

○神畧辭

○二

龍田大神

龍田大神 古天志 龍田大神 比賣神 龍田大神 古天志 龍田大神 比賣神 龍田大神 古天志 龍田大神 比賣神

神拜此始 龍田大神 拜奉る 古昔の

拜式あり 故まづ大和國の方に向ひて拜

奉るべし

日球

是れ東方に向ひて拜奉るべし 天津神

月球

是れ東方に向ひて拜奉るべし 天津神

是れ朝夕をいたる西の方に向ひて拜奉る

べし

皇大御神

皇大御神 天照皇大御神 向御魂天珠命 告賜へる御名撞賢木

是れ伊勢国内宮の方に向ひて拜奉るべし

豊受大神

豊受大神 豊受大神 命亦名大御饌神亦名登

神畧辭

大神氣

是を伊勢、国外宮の方に向ひて拜奉るべし

出雲大社

大國主神亦名大己貴命
亦名大物主命

是を出雲國の方に向ひて拜奉るべし

其國の官幣社神

是を其鎮坐所の方に向ひて拜奉るべし

産土大神

上に同じ

家の神棚

伊勢兩宮の御靈代を始
屋船命及八百萬神の御靈代を鎮
め奉る也

上に同じ

竈の神

火産靈神亦名迦具土命と奥津
比古神と奥津比賣神とに坐也

上に同じ

井の神

水波能賣神と御井神と
鳴雷神とに坐也

上に同じ

廁ろまの神かみ 埴山はにやま毘賣ひめ神かみと水波みづなみ能賣のめ神かみ

上に同じ

祖先よりの靈屋たまや

代々の祖きよの靈たまを祭まつる処ところあるに今の
世の人の佛ぶつ壇だんのうちよ合せ祭まつるの
あとり神かみのとくあるまじき事ことあり
別わかは神かみ棚たなのびとき棚たなを設たてけて祭まつ
るべき也なり

上に同じ

是こゝ神かみ拜まつの大畧たいりやくあり。かくのおとく其方そのかたとく

に向むかひ。その御前みまへにぬうつきて拜まつと奉まつるべし。

言こと多おほきハ怠おこりの基もととあるをもて。殊ことごと更に言こと少すく

きを專ひととすれを。そままくの神かみの御名みかをあむら

く省たぶき奉まつじて申まをさばやもよろし。家内いへのうちの人々

も亦また如是かく毎朝まいあさうあら亦また怠おことること無なく拜まつ奉まつ

るべし。神かみを敬うやみ奉まつじて君きみと親おやとに嚴重おびそみ仕奉まつ

じて。家業いへのふりを怠おこらずいやままくは榮さかえあ人ひと事こと

をおもひ。世よのあひとのあひとも成あむ事ことを思おもふ

へ。万物の司と生を得し人とする此道あり。人の
智を押し弘むを如何なるよりも廣く深く成も
のあるを。遊藝などを好み其道に志を棄てれ
て徒らふ年月を送らむは甚愚ある事なり。今
や官に學校を設け給ひて人の智を開らしめ
賜ふ。加ふる御親愛を忝あはる。各もく其好め
る道の學を勉勵名を天の下に擧るむ。是の
功業人と成あむ。君に對ひ祖に對ひてと

よなき忠孝人ともいひつべし。うにもかくに
も神を敬ひ奉るは皇國に生れし人の人とする
道の本を勤むるにし有れば。也免鹿畧を思ひ
奉らむ。慇懃に仕奉べき事にぞ有ける

○次にあぐるを。そましく神等の御功徳のあら
ましを言少に説とるあり。讀見て其御恩頼
の忝かみを思ひ奉るべし

○龍田大神

是の大神の御社は。大和国平群郡龍田立野と
いふ処にて。今楓の名所ある龍田川の東の
方に有る。この延喜此祝詞式ある龍田風神
御社の別社あり。日向處。夕日。乃日。隱處。乃龍田船
祭詞に。朝日。乃日向處。夕日。乃日。隱處。乃龍田船
立野。乃小野。本吾宮。波定奉。云々有。ごしく。此大
神の自らうく宣給へるに依て。朝廷より此所
に齋ひ奉り給へる御神にて。世中の風。及人の

息を掌り給ふ故に。今この処に申こゝを。何因
までも聞之上げ給ふ御徳坐ませば。遙に遠く
放ざりとり處の神を拜奉るに。たまづ始にこ
の神を拜奉るは古昔の例あり。然るは其の御
前に白を祝詞に。天津神國津神。爾日。爾異。爾願
白須事由乎御氣乃共走出。瓊駒乃耳跡高。爾聞
上給倍と有こと。御氣乃共とは御氣と風は
即神に御息にて。何處までも通ふ。古典に

證あり。人の息もまゝと風にて。音聲を爲し。言語
を爲すも。皆この神に御靈に頼むと也。故神拜の
始に。必まづ此大神を拜奉るべし

○日球

日は世の始と。天御虚空に係て。天津神等
猶坐まし。即天照皇大御神掌り坐まして。世
中を限無く照し給ふ御國あり。故大御神天石
窟の戸を閉て刺幽と居りし時に。天原皆暗く

天下悉く聞しと。御記に見えと承ふとくおれ
を此大御光を蒙ることの御恩頼を思ひ奉り
て片時も忘るべうらげ

○月球

月の御国を伊邪那美大神及国常立神を始め
奉て豫母都神等鎮り坐まし。即月夜見命主宰
坐まし。大地に屬て旋りつゝ。日に亞て世中を
限て無く照し給ふ。甚も尊き御国なり

○皇大御神

是は祝詞に神風乃伊勢国折鈴五十鈴原乃底
津石根尔大宮柱太敷立高天原尔千木高知
鎮坐須と有とや。此処に鎮座まし。掛卷も畏
き天皇の御祖即ち日の御国を主宰り給へる
天照大御神此神靈に坐まふ。神功皇后の御
時御親ら名告給へる御名。撞賢木嚴御魂天疎
向津媛命と申奉るはこの大朝廷に坐まして

の亦名あり。抑天皇の朝廷を始免奉り天下四方の人民を御親愛坐ませる由は宇氣母智神の神體に成まる稻種を始め五種の田種子を御覽せる時に是物等者宇都志枳青人草之食而活倍支物也と詔給へる御語にて明白あり。然まば天下に生る、者晝夜とあく御惠蒙らざるは有ことあり。然るに世の癡人米を見て菩薩あど、云ふえ、いりふ物あらまると甚愚

昧あるかぎりにて有ける

○豊受大神

是は伊邪那岐伊邪那美神の御子火神迦具土命と土神埴安姬命との御子稚産靈神の御子に坐て衣食住として世人の命はく食物着物住家居に御靈幸ひ給ふ大神に坐あは。抑世中に有る万の物も原世の始より自然に有る物にえ非む。悉く神の御靈幸に依て成出し物あは。

○辨神畧辭

○ト

其そ中ちゆうに此この大神かみ也なり。米こめを始はじめめ五種いつしゆの穀物こむつ絹布のきぬぬの
草木くさきに至いたる迄までの大原おほもとの神かみにぞ坐まましける。然さ
るは此この神かみの神體かみかたに成なまる稻種いねこめを。天照大御神あまてらすおほみかみ
天長田あめのあうとほに殖えしめ給たまひ。その稻穀いねとくもて天津神等あまつかみら
を祭まつりとぬひ此大神このかみをも嚴重おごそに祭給へまつりたま。稻いねの
初穂はつほを以て祭給へまつりたまる御祭みまつりある故ゆゑに新嘗祭にいあめまつりと
申まをすあり。是ことあむ今いまも朝廷てうていにて年々としとし行おこなひ給たまふ新
嘗祭にいあめまつりの由縁ゆゑんある。伊勢宮いせのみやにては九月十七日くわがつしちにちと

定さだめ給たまふ。是こともて古昔いにしへ此御祭このみまつりの濟おほざる間ほど
新米にいこめを食くえむと聞きえとり。今いまも罔々くわくわくみて新
穀振舞せふらまひとて神かみをまつ人ひとをも招まきて必かならず祝い
ふとぞ。儲飯たくひをむ古いにしへくも給たまふと云いひ。世よの言ことふ
も給たまふと云いふ。其ことは神かみに賜物たまものを頂戴たうたいする義ぎか
り。ままとめしと云いふは何なにによよる身みに受納うけなる
を云いふ言ことふままを飯いひえめし納いる。物ものの中ちゆうにも
第一だいいちの物ものあるが故ゆゑの名なあり。ううくくて此大神このかみの

亦名宇迦之魂命亦名御饌神と白しまと稻荷
大神と申せ。其御徳に依る齋以奉まゝ御社
につきては御祢あは。彼の狐をもて稻荷の大
神とするへ甚じき凡俗の誤りよまといともか
しこき事よあん

○出雲大社

出雲国八穂米杵築宮と申て。大國主神鎮座ま
し幽冥事知食朝廷あは。是れ健速須佐之男命

の御曾孫に坐して。大八島国を經營堅め給へ
る大神に坐あり世中の目に見ゆる事は顯明
事として天皇知食目に見えぬ事は幽冥事として
此大神知食て。人の世に生ま出る事まゝと死て
往く後の事誰が爲を態とも知られど行てる
る幽事の大原を治給ふ大神に坐すあは然を
を現世の目に見ゆる惡事ハ顯明に朝廷より
答め給ひ会に知ぬ惡事の有る人てん知

らぬ神を欺くこと能えを幽冥より神の御罰
を蒙る事あり。まると善事を修して幸福を賜は
るも同じ趣にて善惡ともに其應報非ありと云
ふ事あり。彼の佛法の教に極重惡人無他方便
とて一聲南無佛皆已成佛道と云ひ勸むる
を實に然る事と思ひ一聲の念佛一誦の題目
に何ある罪惡も消滅をべく思ひ取て一向に
其道に迷ひ入まるといと愚昧ある虚心にぞ

有ける。生きても死ても神の世中おまむ心を
直く正しく古歌に「後の世も是世も神よ任ま
るや愚ある身の信あるらむ」と詠し心のこ
く意に汚き隈をおうむ。人知らむとて加げく
らき惡事を爲さば幽冥より御覽せる神に慙
むると無く有てこそ信の皇国心皇国魂の人
とは云ふべうりけむ

○其国の官幣社

の神界辭

出雲大社の神也。世中の幽事を統治め給ひ。国
の官幣社。まゝと国幣社の神也。其国々々の目
に見えぬ事を其まゝに持別て領めを神に坐
せむ。必以毎朝夕奉て。家よも身にも禍害あ
く擁護給えらむ事を祈て奉るべし

○産土大神

是て其郷の幽事を知食る。氏子を親しく守護
給ふ御神に坐せあり。其て人々子を産てまづ

産土神に参詣しむるを。其子の生を出るを
産土神は更あて。神等神議とまひ。此世も更あ
て死て往く後の世とて。其歸る所を定め給
ふあるが故あて。儲その本生まじ地を放きて
他所に移て住む人。まづ本居の神を拜みて
次に今住める處の神を拜むべし。あう他所に
移て住むを現にくさくの由縁有めまじ幽よ
と神どち議まして。今住める所の鎮守の神本

生の神に於て是て擁護とまふ幽世の御定め
有る。其て現世に送籍の定め有るがごとし
是のごやうかきむ此神もし不信の者の失を
咎めて崇正をえし坐さば何よ憑き奉るとも
他所の神さらに助け給ふべうらむ。餘社の神
の崇正を我が神の恵にてえ宥め給えむ如
是有む由緒のてて餘社の神を信とるも産土
神を鹿畧に思ひ奉らば慇懃な仕奉る生の子

の弥續々に榮えむ事を祈願申べき事にあむ

○家の神棚

是えまづ第一に伊勢兩宮の御祓の玉串を申
請て其をやがて兩宮の御神體として齋ひ奉
じまゝと某々に尊ひ奉る神を更あり。彼神の御
靈代もこの神の大麻も同じ神棚に齋ひて其
祭日まゝと式日あどよ神酒洗米をも獻じ。有む
る神等を招奉まゝる御屋として并奉る事あど

借ての家内の神棚に必宅神屋船命を齋ひ奉べき事おまど。是外宮の豊宇氣毘賣命と同し神に坐せ。其清輔朝臣の奥儀抄み保祭の詞に屋船豊宇氣姫命と有る。知るべし。志をらく省き奉て。日々其心をへよ。拜奉るへし。

○寵の神

是伊邪那岐伊邪那美神の御子火産靈神と。大年神の御子奥津比古奥津比賣神と合せて

三柱ミササキ坐イあり。火産靈神を寵に齋ひ奉る由。朝廷の御炊所に祭りせ給ふ。效ひてお。其神名式に大膳職坐神の中。火雷神社と有る。御社を因史イニシに齋火武主火命と有。みて知べし。ま。奥津比古奥津比賣神。は諸人之持伊都久イツク寵神也。と神典に見えて。寵と。即へば。の事にて。其在処を寵所と云ふ。但し朝廷にて。奥津比古奥津比賣神と。申給は。祭らせ給ふに。は庭火皇神と。の御紀に見え。と。火は世の

始め自然に有し物よも非む。火産靈神の御靈
 に依て成出し物よも。殊更み汚穢を惡ひ給ふ
 由緒何れを竈所も何にも浄く潔くすべき事
 あり。然るに三寶荒神とて髪の逆さまに生と
 る物を祭まるあど。甚忌くしきこ。世の極あり
 け。さう、る物を速く取捨て正しき神を齋い
 奉るべき事にあむ

○井の神

是え水波能賣神御井神鳴雷神と三柱に坐あ
 じ。其の水波能賣神を伊邪那美神の御子に坐
 し。御井神の朝廷に坐摩の御巫の祭る神五座
 阿須波神波比岐神と共祭給ふ。鳴雷神を
 浪速の坐摩宮と即との御神を。天兒屋根命の御子天忍雲根命に坐て。こは主
 水司に祭ら給へ。主水を石ヒトリと訓む
 あり。故にモヒとも云ひ其水を盛て飲む物
 に主水司と云ふ。今石ムドと云ふ。音便
 類も。この三柱の神を合せて井の神と齋
 詭言あり。

ひ奉る。吾人の日々に賜ふる真水の原に幸
 ひ給へる神等に坐せを。其え神祇百首に
 山里の朝けの水を結ぶ身も御もひの神の恵
 とは知と詠るごとく。まづ朝に起て貞手を
 洗ひ口瀬ぐより始て諸の汚穢を淨むる。用
 ふる事。日々に幾斗と云ふことを知らむ。然と
 を常よ水を飲とき用ふ時。この神等の御恩
 頼を思ひ奉て益あき事に多くの水を用ふ

べうらに

○廁の神

是に埴山毘賣神と水波能賣神とに坐あ。古
 書に此者廁神也と載し傳とる文を無とど。こ
 の二神を尿と尿とよ由縁ある神に坐とを。是
 を齋ひ奉て違ふことあし。俗に佛家の鳥糞
 物を廁の神ありと云ふ。廁を住居の中にも
 信よも足らぬ非説あり。不淨の極とる処ある故よ。人まと卑め汚らで

○并神畧辭

て。神の掌つらぎとまふ事を忌いまして慎しんむとあく
自おのづうりに無禮いやあさまをも行おこなふことの有あきむ。殊ことに
よく心得こころして在あべし。然さるは世よにも流行たきり目の病まひ
た廁らたやの神かみは祈いのて愈いやし給たまふと云いひ。常つねは廁らたやの
穴あなに唾つたきを眼めを病やむと云いふも。信まことふ然さる驗あかし
もあるべきあり。まと女にの日々ひは廁らたやを掃はき淨きよ
めて晦くわい日にちごとに燈明とうめいを獻たまるを。腰こしより下しもの病やま
を憂うれひをみても云いふめ。儲たくまとうく不潔けつの

處ところよた妖鬼まがひの類いひの必かならばよて集あふ事の由よし
縁よしありて。神かみの守護まもりあき時ときハ禍害わざはひを爲なすこと
有あきむ。廁らたやを成なすべき際きざり淨きよくまべき事ことあり

○祖先靈屋あひのたまのたまや

祖先靈屋あひのたまのたまやを佛壇ぶつだんのうちよ合せ祭まつるハ甚いたしき
癖事ひがあり別ことは神棚かみだかの如ごとき棚たかを設まつけていけよ
も清淨きよらうよして祭まつりてまを靈屋たまやと唱いふべし。佛
法渡ぶつたぎてよて此方こなた代々よの祖まやを佛ぶつと云いふ物ものよ

成なりせりと思おもへる。法師等の言ことばを惑まどへる甚いじ
 き誤まちりあり。皇國こくにも生うむ、人ひとみか親おやの祖そとより
 代々よゝゝ祖そとの遠津祖とみつを探たづぬきを必かならば神かみかじも
 し其そのの中なかに功業いさぎある人ひとあらを其そのも即すなはち神かみは
 こそかま佛ほとけも成なりべき謂いもある事こと更さらよあし然さ
 るえ菅原神すがはらのかみを始め奉たてまつり古昔いにしへより今いまも至いたるま
 だ神かみも成なりる人ひと等らえ且かつ々つ有あるも佛ほとけも成なりま
 る人ひととてえ一人ひとりども有ある事こと無なきを以もつて知し

べし。其そのえ彼かの阿彌陀觀音あみだくわんおんかど云いふ物ものも人ひとの
 作出つくせる物ものにて前まへの世よも更さらあてこの世よも
 後の世よももさる物ものの居いる処ところも無なしといふ事こと
 をよく辨わふべし。さて代々よゝゝ祖そとの靈たまもその靈屋たまや
 も鎮しづめて家いへも禍害わざはひなく生うむ子の弥い續ぞく々々も榮さか
 えむ事ことを守まもり給たまふかまを世よも有ある人ひとも仕つかふ
 るごとく慇懃けんそんに仕つかふべき事ことも有あり有あり
 すと

この書に云へる事ども總て先師の
説あるをうく省きて説とるのゝに
て己が臆度に出る言とてを一言と
めも有る事あし今世の中漸々よ開
けて各もく神を嚴重に齋き奉るべ
き事ハ覺悟つとゞも神の御前よ出
て其の拜と奉るべき状及申べき言

をも得知らぬ人多しさる人々にと
もやましく稱ふべき言葉を示さむと
て加くを物しつるゑと志有らむ人
を師の著されとる毎朝神拜詞記ま
と玉禪の書を讀て其くをしきを知
てしをし

明治五年と云ふ年の八月

明治五年十月御免許
同 七年七月發 兌

大阪心齋橋筋壹丁目

書 大野木市兵衛

同 疊屋町八幡筋南入

肆 瀬戸清次郎 版

